

# 勞働の倫理

藤井健治郎

勞働の倫理は勞働てふ語の或る意味では古代からあつたものであるが、或る他の意味では古代にはなく、近代に至つて始めて見るやうになつたものである。近頃では一つの意味の勞働倫理が學問上一重要問題となつて、多くの學者によつて盛に取扱はれるやうになつた。近頃出版されるレーアブ的の倫理學の書物に於いてさへ、此問題を取扱てゐないものは殆ど稀である。中には他の問題との權衡上、此の問題に對して餘り多くの頁を與へ過ぎてゐはせずやと思はれる程のものさへ見へる（Cronin, *The Science of Ethics*）の如きは其一例である。一種の勞働倫理が斯んな風になつたのは、それは産業革命以後の社會事象に誘發・促進されてなつたのであつて、決して偶然ではない。

さて勞働といふ語を極く廣い意味に解すれば、勞働とは人間に對して或る有用な結果を齎らす所の、潛勢の現勢への轉換であるといふべきである。此意味からすれば、すべて人間の爲す仕事は勿論、高處から落つる所の水が發電機を動かすのも、又牛馬が車や鋤を曳いたりするのも、皆勞働といふ事が出来るのである。乍併、目下倫理學上の問題となつており、又私が今此處で取扱はうとしてゐるものは、そんな廣い意味のものでなく、それよりもつと狭い意味のものである。即ち水のやうな無機物や牛馬のやうな動物や……それ等を總括的にいへば自然物と謂ふべきであるが、其自然物の爲る勞働はすべて之を除いて、唯人間のする勞働のみを意味してゐるものである。

斯様に勞働てふ語を人間の爲る仕事のみに限定して、さてそれを如何様に定義すればいふかといふに、これには種々の陳述の仕方がある。『勞働とは將來の善を目論見んで爲されたる所の、精神又は肉體の苦しい努力である』(Jevons, Political Economy)といふのやら、或は『勞働とは、其語の重なる意味では、或る利用あるものを産出せんが爲に、詳しくば如實に人間の需用や、目的や、利害に役立つやうに性質づけられており、而してそれが爲に價値を有つてゐるものを産出せんが爲にする所の力の發表である。』

『其狭い意味では、労働は其如何なる種類たるを問はず意識した人間の力發表である』(Schönberg, Arbeit, Arbeiter, Artikel in Handwörterbuch der Staatswissenschaften) といふのや  
 ら、種々のものがある。要するに是等は、労働とは或る利用の結果を齎らすべき目論見を以て爲されたる、意識的な人間の仕事であるといふ陳述に歸著するのであるが、併斯うした陳述でも意味があまり廣過ぎて、労働の意味が判然と浮いて出ない。何となれば例へば一切の戸内戸外のスポーツや、散歩や、すべて休養慰勞娛樂等の爲にするものでも、それ等はすべて意識的な人間にする事であるのは言ふまでもなく、又それ等が人間に對して何等かの利用を齎らすものであることも疑ない。而かも其等のスポーツや散歩に費されたる所の力の發動は、通常之を労働の概念の中から取除いてゐるからである。それだから労働の概念は前に掲げたやうな陳述よりも、もつと局限されたものであらねばならぬ。そこでシェーンベルヒは之を經濟學上の術語と定て、次のやうにいつてゐる。『經濟學上の一範疇としての労働、即ち經濟學的意味に於いての労働とは、何等か經濟的に利用のあるものを、換言すれば人間の經濟的需用目的利害に役立やうに性質づけられたものゝ爲にする所の意識した人間の力發表である』(Schönberg, ibid.) といつてゐる。是は労働てふ語を經濟學上の一術語と

定めてしまつての陳述であるが、而して其他の經濟學者でも、此シェーンベルヒの考に似た考を有つてゐる人は多いのであるが、是でも勞働の概念は決して判然しない否そればかりでなく、それが爲めに其概念が却て混亂される虞がないでもない。何となれば例へば學者や文藝家や、教育者や、官吏や、軍人やのする仕事は、其適當なる意味に於いての經濟的のものでない、而かもそれ等は人生に取て缺くべからざるもので、そうして勞働であるには相違ない。それなのに勞働を單に經濟學上の一範疇としてしまうので、社會問題の解決の場合などに不徹底なことなども起つて來るからである。

そこで種々考慮して見ても、勞働の概念を判然限定することは決して容易でないやうである。私は假りにかう陳述しておかう。勞働とは人間が其人生の目標として、言ひ直せば人生の内容として、更に言ひ直せば人生の意義の發露として、繼續すべき豫想を以て爲す所の、意思的な人間の力發表である。かやうに言つておけば、略要領は盡くしてゐると思ふけれども、それとて完璧なものでないことは無論である。今は唯、豫備的定義として述べたのみで、其詳しい論定は本論に於いて追々するより外に仕方がない。又前掲の陳述の意味も、今此に説明せずとも、追々の論述で解する

ことゝ思ふ。

勞働の概念を右のやうに限定すれば、工場勞働者や、農業勞働者など、即ち所謂筋肉勞働者の爲る仕事はいふまでもなく、學者や、教育者や、宗教家や、文藝家や、政治家や、それ等の人々の爲る仕事、即ち所謂頭腦勞働も亦勞働に相違ない。従て工場や田畑に働いてゐる者が勞働者であるならば、研究室や、教壇や、官廳で働いてゐる人達をも勞働者と呼んで、毫も差支はない筈である。之が勞働てふ語の一つの意味であるが、此語は精密な理論的考察をまじえない場合には、更に一層限定された意味に理解されるのが通常である。そは如何なる事かなれば、勞働者といへば前述の理由によつて、所謂筋肉勞働者は勿論、其他一切の頭腦勞働をする人々をも、すべてそれであると理解して可い譯であるけれども、實際はそうでなく、それは所謂筋肉勞働者のみを意味するものと理解されるのが普通である。斯様に番に常識の間に然か理解されてゐるのみならず、學術上に於いても亦勞働者は多く筋肉勞働者の意味に理解されてゐる。以上は勞働者といふ語についてあるが、勞働といふ語にも亦同様な事柄がある。即ち勞働てふ語は、前に述べたやうに、廣義に解すれば、筋肉勞働は無論、頭腦勞働もすべて包含してゐるものと見られるが、理論を雜えない普通の場合に於いては、多

く筋肉労働の事と理解される。是が私が更に局限された労働てふ概念の意味といつた所のものである。

約言すれば人間のする事に限つて用ゐられてゐる所の労働てふ概念に、廣狹二義がある。廣義に於いては筋肉労働でも、頭腦労働で、人間の意識的にする仕事はすべて之を含み、狹義に於いては單に筋肉労働のみを指してゐるといふのである。

斯やうに、一定の意義の判然してゐるやうに適當に限定された労働といふ概念にも、更に猶廣狹の二義があるから、其倫理を論ずるに當ても、先づ一般原理を論じて更に特殊の理論を述べ、二段に分けて説かねばならぬのである。

## 一

先づ廣義からいふと、労働てふ概念は、人間が其人生の目標として、繼續すべき豫想を以てなせる、意識的な人間の力發表であるといふ意味であるが、その定義は一方からいへば、直ちに職業といふ概念にも當筈めることの出来る定義である。但だ職業といへば、系列として出来上つた靜的な活動の雛形を意味し、労働といへば其職業を活かして働かせた動的のものを意味するの差異があるばかりである。さればシエー

ンベルヒも『勞働は同時に多數人間の必要なる職業動作である。而して斯やうなものとして彼等の生活の重なる内容を形成してゐる』同上といつてゐる。かやうに職業と勞働とは、譬へば霧と雲とのやうに全く同一の概念でないことは無論であるが、しかし其實質からいふと同一なものである。それ故に職業についての倫理は、やがて廣義に於ける勞働の倫理であらざるを得ない。従て吾等は職業倫理を説くことによつて、廣義に於ける勞働倫理を明にすることが出来る。

職業は人生に對して三つの意味を有つてゐる。而して職業の倫理は其三つを基礎としてゐるものである。謂ふ所の三つとは第一に自己の生活を支持していく事。第二に自己の生活意義を發揮していく事。第三に一般に人間社會の生活内容を豊富にしていく事是である。

第一の自己の生活を支持していく事とは他でない、自己の生命を維持し、之を成長發展させていくことをいふのである。吾等は現實の肉體も有ち、現實の精神も有てゐる現實のものである。此等のものを存續・成長させんが爲めには養はねばならぬ。養はずにほうつておけば死んでしまふは生理・心理の當然である。然らば其養ふ人は誰かといへば、それは自分であらねばならぬ。自分の心身は身分でそれを養

はねばならぬ。自分で自分を養ふの道は職業である。此意義に於て職業は自己の生産を支持していく意味を有つてゐるといふのである。

右は極普通の事柄で、誰にも解ることのやうであるから、別に説明の要がないやうに見えるが、併、自分の心身は自分でそれを養はねばならぬといふこと、又自己が自己の生活を支持していくことが、即ち倫理的であるといふこと、は、一應之を辨じて、私の意味を明にしておかなければならぬ。

第一に自分で自分を養はねばならぬといふ譯は、人間は人格者だからといふ點に存してゐる。人格者とは何ぞやの説明は他の場合に説いてあるから之を略しておくが、人格者としての人間の實相は自主自由である。自己の理性——行的理性、即ち良心が、自己に於ける最高至上の權威者として、自己自らの立したる法則以外、全く何者によつても動かされることなく、其純眞な力を發揮して、自己に於ける他の一切を支配し、すべて其命令に従はしめる處にある。而して道徳といふものは外でもない、其純眞な自主自由を立て通したといふことを指すのである。消極的にいへば其純眞な力を曇らしたり、妨げたり、汚したり、損じたりしないことをいふのである。約言すれば、其自主自由な純眞の力を、さながらに發揮するのが善であつて、それを蔽遮し

たり、汚損したりするのが悪である。

そこで自分を養ふといふことに就て考察するに、自分で自分を養つてゐてさへ、種々の事情が起て來て、自己の純眞な本性を汚損し易いものである。そうした處へ其上更に自分を養ふのに、自分の手足を以てせず、他人の力に依頼するやうでは、種々の處から種々のかゝり合ひが生じて來て、縁に従て變つていく心を種々に紛糾墮弱せしめ、自己の自主自由を害し、自己の眞面目に汚點を印するやうなことになる勝である。執る可き手は、天地間に、自分の手より外にない、立つべき足は、六合の裡に、自分の足より外にない。その自分の手足でさへそれが現實のものである限り、決して絶對的には頼み得ぬ。況んや他人のそれに於いてをやである。縱令親兄弟のそれでさへ、決して絶對的には頼みにならぬ。絶對的に頼み得るものは唯絶對のみである。それで自分で自分を養つていてさへすれば、それで倫理上絶對に過なしといへぬのは無論であるが、併他人に養はれて行くのには比較すれば、倫理上の過誤に陥るることが割合に尠いといへる。反對の方向からいへば、自分を養ふのに自分の力を以てせず、他人の力を以てすれば、必ず屢道德の眞價を傷つけることがあるといへる。

人は倫理上自分自身を養つて行かねばならぬと論斷した私の意味は、右に述べた

通である。故に私はデダクテイシユ教訓的に、説教的にさういふのでなく、倫理の純理上から然かいふのである。是は私の倫理學上の立場を明かにせんがために、此處に一言辯じておく次第である。

次に此場合で辯明しておかなければならぬ第二のことがある。そは如何なることかなれば、私は、職業は自己の生活を支持していく意味を有つてゐるものであると述べたが、此命題は、若し人は職業を勤めることによつて生活の資糧を得、それによつて自己の生活を支ふるものであるならば、職業は生活を支持して行く所の方便であつて、其者として價值を有つ者である、かやうに解され得るのである。同じ意味ではあるが之を他の方面から考察すれば、現實の生命を維持成長せしめる所の資糧は、すべて吾等に取つて有用なものである。即ち諸財ギョウジである。職業は其諸財を産出して、以て吾等の生命を存続成長させる。其意味に於いて職業は人間に取て缺く可からざるものである。かういふ意味にも解釋される。併かうした解釋は、私の意味してゐる所でないといふことである。

此解釋は、職業は人の生命を支持していく諸財を産出する者として、人間に缺くべからざるものであり、價值あるものであるといふのであるが、是は職業を功利的に、或

は經濟的に觀てゐる所の者である。職業は確かにさうした面相をも具へてゐるのは事實であるけれども、併それは倫理的とは異ひ、又倫理の基礎となることの出来る者でもない。若し單に功利的經濟的價值の方相からのみ職業を觀るならば、換言すれば單に生活資糧を得る方便としてのみ職業を觀るならば、例へば壞風亂俗な職業でも、之を職業として倫理的に認容しなければならぬ道理であり、それ處ではない、社會國家の制裁あるといふことは別して、例へば竊盜の如きも職業としては倫理的に之を認めねばならぬことゝなるであらう。然るに此結論の如き思想は、甚しい謬見であることが明かなことであるから、職業の功利的、若しくは經濟的價值は、之をその倫理的價值と截然峻別しなければならぬ。

それで私の意味してゐる所は、職業を功利的、又は經濟的に觀てゐるのでない。職業は生活の資糧を吾等に齎らす所の結果を生むけれども、職業は其結果の爲にのみ價值があるのでない。吾等が職業を人生の目標として、否自己の生をして中實なかみのある者たらしめんが爲に、更に換言すれば自分の生の機はたに於いて、理想を現實に織りなして行かんが爲に、同じ事を反對からいへば現實の素材を理想化して織つて行かんが爲めに勤めてゐると、生活の資糧は自ら産れて來るので、それを得るのか必ずし

も職業の目的でないといふのである。

之が私の意味してゐる一つであるが、猶他に今一つある。そはかうである。吾等は勞働(廣義)をするに當て、その齎らすべき結果を豫想された目的觀念とすることがあるのは事實である。此場合に於いて唯偏へに其豫想された結果といふことに執著して、それを獲得しやうとすれば、それは所謂外物價值に墮したものであつて、倫理價值を觀てゐるものでない。それに反してその豫想されたる目的物を實現せんとする人格者としての自己の活動の様式に注意を集注して、その完成を圖ることに勤めれば、それは所謂人格價值を目標としてゐるものである。従つてそは倫理的價值を有つてゐる所の者である。此場合私はリップスと共に、すべて積極的の者は善なものであるといふことを豫想してゐるのは無論である。是が第二の意味である。

職業は生活資糧を齎らす者として、人間に缺くべからざるものであるといふ命題に含めておいた私の意味は右の如き者である。而して此論は直ちに勞働その者の上にも移すことの出来る論である。

職業の第二の意味は、自己の生活の意義を發揮して行くといふことである。是は如何なる意味かなれば、人格者としての人間の生活は理想實現の生活である。而して其理想の實質は床の置物のやうに、飾られて眺められる靜的なものでなく、自ら動き、又他を動かす所の活勢である。それ故に理想が實現されるのには必ず活動が必要なのであつて、活動がなくして理想の實現があり能はぬ。然るに現實意識の中に現はれて、現實の人間を動かす所の理想は、如實の理想その者でない。——如實の理想は普通認識の對象となることが出来るものでない、従て普通認識の形で記述することの出来ぬものである。——現實の人間を動かす所の契機となる理想は、種々な現實の條件によつて具象化されたる理想である。換言すれば、現實意識中に寫象されたる目的の觀念で、而してそれは理想の光線を透されたもので従て理想色を帯びてゐる目的の觀念である。而して其目的は長短不同であるが兎に角繼續的なもので、一瞬的なものでない。現實の吾等を動かす所の理想といふものは、右に説いたやうなものである。

そこでさうした意味の理想を實現する活動は、一定の目的を趁うていく所の繼續的な活動であらねばならぬ。然るにその一定の目的を趁うて繼續的にする所の活

動は、是れやがて勞働ではないか、職業ではないか。此意味に於いて職業特に適切に勞働は、人間の生活を意味づける所の者、人間の生活に中實を容れるもの、更に換言すれば人間の生活を人間の生活として觀るを得しめる所のものである。鋏を動かす農夫の働、鶴嘴を振ふ鑛夫の働、バンドルを握る機關手の働、それ等は働きとしては比較的簡單なものである。乍併、それ等でも、バレットを手にしてキャンザスの前に立てゐる藝術家や、真理の祕庫を開かんと、試験管を手にし、顯微鏡を覗いてゐる科學者と同じやうに、すべて彼等の生命を打ち込んでやるに至ては全く同一である。それが彼等が天から呼出されて授けられた彼等の天職であり、Vocationであり、Berufであるに至ては同一である。

是が職業の第二の意味である。私有財産制の確保されてゐる現代に於いては、第一の生活の資糧を得る者としての職業は、之を有なくとも宜い人もあり得る道理であり、又事實さうした人も多々あるのである。されど此第二の意味の職業は、其他の人々はいふまでもなく、さうした人達でも必ず之を有たなければならぬ筈である。然らざれば彼等の生活は醉生夢死の生活であり衝動本能の生活であり、禽獸蟲魚の生活であつて、人格者としての人間の生活でない。然るに不思議なる哉、世には「無職

『業』を標榜して得々たる者がある。彼等は自分の體が犬馬になつてゐるのを誇る所の手合である。

#### 四

職業の第三の意味は一般に人間社會の生活内容を豊富にして行くことである。そは如何なる意味であるかなれば、個人が自己の個性に立脚して、自己の天職であり、Vocation であり Beruf である所の職業を忠實に勤める所があれば、それで彼は人格者としての意味ある生活をなせる者である。是は既に前節に説いた處であるが、それと同時に、彼は一般人間社會に對して、其生活内容を豊富ならしむべく貢献した所の者である。何となれば社會の生活内容は、社會を組織してゐる各員が、各物かを寄與することにより、而して唯それによつてのみ與へられる者なるが故である。此場合個人の個性が鮮かであればある程、其貢獻する所が愈多い。例へば文學とか、藝術とか、宗教とか、哲學とかは、社會文化の内容中最重要なる部分であるが、是等は誰でも出來るといふものでなく、唯或る特殊の天分を具へた、はつきり判然した輪廓の個性を有つてゐる人のみ、之を能くすることが出来る。是れ文藝家、學者等の社會生活の内容に寄

與することが多いといふ所以である。

職業は社會の生活内容を豊富にするものといふことは、更に次のやうにも説明することが出来る、個人の働きは、單にそれだけとしては比較的微力なものであるが、併それ等をすべて合する時には甚だ力強いものになつて、大いなる働をするものである。さて其個々人の力を合せて強大なものにしようとする方法に二つある。甲は同一種類の職業又は労働に徒事してゐる所の個々人が、互に其力を戮せ、一致協力して仕事をする方法であり、乙は銘々が出来ただけ自己の天分であると信じ得る所の職業又は労働に従事して、それに依て却て自然に強い統一をなす所の方法である。右甲乙兩者の中で、甲は極普通の擴大統一の方法であるから別に之を説明する要もないと思ふが、乙者の方法は、一應之を説明しなければならぬ。此乙者の方法、即ち銘々が自己の天分であると信じ得る所の職業又は労働に従事することによつて、統一擴大を圖るといふのは、言葉を換へていへば所謂分業又は分勞の事である。分業はシェンベルヒのいつたやうに、之を(イ)技術的(ロ)職業的(ハ)國際的の三種類に分類することが出来るが、シェンベルヒ前掲文参照、しかし其いづれにしても、各労働又は職業が段々細かに分れて行けばいく程、其一事には精しくもなり深くもなるが、其代りに

は愈一方に偏したものになつて、即ち片輪なものになつて、それ獨りでは立ていくことの出来ないものになり、必ず他の種類の職業又は勞働に憑らねばならないものになる。それ故に分業といふことで人々が段々別れ離れになつて行く半面には、其別離が甚しくなればなる程、それは又愈緊密に結合統一されなければならぬ理勢が存してゐるのである。約言すれば、ディフレンシエーションが愈強ければ、インテグレーションも亦益嚴ならざるを得ないといふことである。分業の性質といふものはかうしたものであるが、乃で人々が銘々自分の得意としてゐる方へ活動して、何等かのものを産り出せば、前述の道理によつて、其統一團結が愈緊密にされた人間社會に、自分の最も得意なものを貢献したといふことになるのである。職業の第三の意味は、かういふ風にも説明されるのである。

斯やうに分業によつて、銘々から寄與された銘々の得意な産出物は、自ら綜合して社會上に美しい錦を織り出し、美しい蜜を造り出すのである。其錦や蜜は實質、其者からいへば所謂文化諸財カルチュラル・ナギユルで、其抽象した性質に名づけていへば文化カルチャーである。——文化は社會倫理的概念で、否それとしてのみ最も適當に理解され得る概念であつて、單なる經濟的概念でもなければ、又單なる法學的概念でもない。而してそれは絶對的に

文弱的概念でないことは勿論である。——分業に趨つてしまつた個々人は、すべて何人でも自分獨りの働に頼つて、それで生活を保つていくことは全く出来ぬ。社會の文化の園に於いて、社會其者の文化財たる蜜を飲み、錦を衣ることによつてのみ其生命を維持・成長せしめることが出来るのである。つまり人間は、一方に於いては職業によつて自分で得意で産り出した者を貢獻し、他方に於いては、各人の寄與より成つてゐる所の文化財を社會から享けることによつて人格的生存を完うしていくことが出来るといふのである。

是が職業の第三の意味である。

## 五

以上第二第三第四の三節に互つて、私は職業に關する三つの意味を説明した。此意味は、すぐに廣義の勞働にも當筈まること勿論であつて、從て右の三つの意味に本づいてゐる職業の倫理は、又直ちに廣義の勞働の倫理である。是は勞働倫理の根本であるが、其外猶職業に對する忠實・勤勉等の倫理があるのは言ふまでもない。此廣義に於ける勞働の倫理を基本として、更に狹義の勞働、働ち筋肉勞働の倫理を別に論

せざるを得ない。廣義に於ける勞働の倫理は古代からあつたものであるが、筋肉勞働の倫理は、是は近代的現代的のものであつて、古代には殆どなかつたのである。

筋肉勞働に關する第一の倫理問題は、勞働乃至職業に貴賤の別ありや否や。具象的に之をいへば、所謂頭腦勞働即ち精神勞働は高尚なるもので、筋肉勞働即ち手足勞働は下賤なる者なりやといふ問題である。

此問題に對する一般の答は、職業乃至勞働には貴賤の別がないといふにあるが如く見ゆる。カーライルは勞働・汗世にそれ程貴いものはないといふ程の意味のことをいつてゐるが、殊に基督教文明に浸ることの深い人は、多くかうした思想を懷いてゐるかのやうに見える。此勞働無貴賤論は、一面から觀れば深いエデュケーション・ディンク教訓的意義を有つてゐるもので、場合によつては大に之を力説しなければならぬ次第のあるのも事實であるけれども、又他の一面から觀れば矢張り貴賤の差別があるやうに觀るのが穩當であるやうな場合もある。私の知人の一人に平素熱心に勞働無貴賤論を説いてゐる者がある。此人が或時私に向て、自分は勞働無貴賤論の思想を懷いてゐるけれども、しかし俵夫の子供に對して、勞働に貴賤の別はないから、お前も勉強して、親爺のやうに俵夫にならねばならぬと説く氣分には如何うしてもなれぬといつたことが

ある。其時其人は彼の平素の主張を裏切つてゐるものである。是は私の一知人に關する一挿話であるが、是の如きもの、恐らくは獨り私の一知人に限つたことであるまい。即ち誰しも或る場合には職業無貴賤論を取りたいこともあるが、しかし何時でも其論で押し通したくもないと感じてゐるのであらう。

それは誰しもの感で事實であると観るべきであるが、此事實は如何に之を説明すべきであらうか、職業の貴賤の有無論は、所詮かういふことになる。

職業の中でそれを爲すのに多くの勞苦を要する者や、又勞苦は必ずしも大ならざども、仕事其者が不愉快に感せられる所の仕事は、奴隸とか、被征服者とか、俘虜とか、さうした弱者にそれを爲さしめたのは、東西古今にある事實である。例へば希臘、羅馬の農業は、殆ど全部奴隸の手によつて營まれてゐたのは事實である。さてかやうなのは手足勞働、即ち筋肉勞働は賤しいからへレテ人たる自分達がやらずに、之を奴隸等にやらせたのであるか、或はその反對に、奴隸などにやらせるから、農業其者の筋肉運動が賤しくなつたのであらうか。是は無論後者である。辛苦な事や不愉快なことは誰しもそれを爲たくない、乍併誰か之をするものがなくてはならぬ。そこで強者が權柄づくで之を弱者に強いるやうになり、弱者は仕方なしにそれに屈服するや

うになる。そこで俘虜や、被征服者や、奴隸など、下等民賤民と見られて爲る所の者が従事することであるから、自然仕事其者をも下等なもの、賤しいものと観るやうになつたのである。之に反して音楽の演奏や學問の研究などは、初め之を勞働などとば考へずに、所謂リジーア・クラスが殆ど享樂氣分で之をやつたものである。アリストテレスの如きはヘレーチンはそれ等音楽や學問やに従事すべく閑時リジーエテを有たなければならぬといつてゐる。(Aristoteles, Politics and Economy)。つまり是は此等の事をオリムポスでやる遊戯と同様に観てゐた一般希臘人の思想を表はしてゐる者である。かやうに音楽や學問は勞働とせず、享樂としてやるものであるから、自然強者上流の者が之をやるやうになる。強者上流社會がやるといふことから、所謂頭腦勞働は上品なもの、高尚なもの、と考へられるやうになつたのである。

かやうに最初から職業を上下に差別して観てゐた譯でもなし、又職業其者を如實に考へて観れば、恰度人間を如實の人格者として観た時のやうに、何等差別を付くべき理由も見出し得ないのであるから、職業無貴賤論も確に一面の眞理を語てゐるものと観て宜いのである。かく職業に貴賤はないとして、唯個人的及社會的立場から観て、其意味に大小輕重の不同があるといふことは、いはねばならぬ。而して其意味

の大小輕重の差別からして、其大なるもの重いものは之を上等となし、小なるもの、軽いものは之を下等となさば、その意味に於いて上下貴賤があるといへるのである。

然らば職業の意味の大小輕重とは如何なることかなれば、職業の中には、極々個性の分明なものでなければ出来ぬ性質のものと、殆んど個性の何者たるを要せず、任意に甲を乙に代へたり、乙を丙に代へたり、又逆に丙を甲に代へたりしても、其諸財を産り出す上には殆んど影響と認むべき程を認めない性質のものもある。例へば文藝學問の如きは個性の分明な人でなければ之を能するものが出来ぬ。従て誰でも彼でも勝手に人を代へることが出来ぬ者であり、之に反して所謂土工の如きは、それが單に筋肉勞働である限りは、甲を乙に代へたり、乙を丙に代へたりしても、その産り出す財の上には殆んど差異を認めぬ者であるが如くである。かくの如く天分の豊かな者にして始めて之を能くすることの出来る者は、單に『稀れた』レアチスといふ意味からして多くの價值を有つことも無論であるが、そればかりでなく、内實的にも、價值の多いもので社會文化の上に重要な位置を占めるものである。之に反して何人でも容易に出来るやうなことは『珍しい』といふことからの高い價值を有つことが出来ないばかりでなく、それ自身の内實的價值も亦卑いものである。是が職業の價值の大小

輕重といふ意味であるが、その事を貴賤といふ語で表はしたとすれば、その意味で職業に貴賤の別があるともいへる。併貴賤といふ語は他に種々な悪い聯想の付いて廻る語であるから、之を以て職業の價値の差別を表はすのに用ゐるのは決して穩當ではない。

## 六

前節に論じた問題に聯關して、一應述べて置きたい問題がある。それは他でない。勞働せずして食ふ者は、乞丐か盜賊であるといふ命題あるが是は果して正見か謬見かといふ問題である。

此命題は私はたしかにマルクスのいつた言葉であると記憶してゐるが、しかし今其出處が如何うしても思ひ出せない。そこで甚だ空想になるが、假りにそれがマルクスのいつた句であるとして、其場合の勞働てふ語の意味はどんなものであらうか。第一節に述べた處の廣狹二義のうち、其孰たゞらであらうか。私はそれは必ず狹義のものである、即ち筋肉勞働を意味したものであると想像する。何となれば『資本論』の中の諸處でなされてゐる勞働の説明は常に筋肉勞働を意味してゐるからである。

(Kapital, 6 Aufl. Bd. I.) (日本社會學院年報掲載稿唯物史觀の要訣並にそれに就いての考察參看)。

それかあらぬか、此マルクス主義の嫡流を以て任じてゐるレニン、トロツキー等の勞農露西亞國に於いて、彼等の立てゝゐるプログラムに見えてゐる勞働てふ語は常に筋肉勞働の意味に理解されてゐる。今其一例として、極めて著しい一節を舉げて見やう。『國會主義的共和制と、商議員組織の共和制との重なる區別は何處にあるかといへば、商議員組織の共和制に於いては、勞働しない階級は選舉權を有たず、又國家の行政に與らないといふ點に存する。土地を支配する者は商議員で、勞働の場所に於いて勞働者中から選出される。即ち工場鑛所、仕事場、鑛山、大小農村に於いて選出される。ブルジョア即ち以前の財産家、銀行家、貿易業者、投機家、商人、小賣商人、高利貸、ブルジョアの有識者、僧侶、僧正等——一言にしていへば、黑隊の全部は、何等の選舉權もなく、又政治上何等の根本的權利を有たぬ。云々』是はニコライ・ブハーリンのボルシエ<sup>エ</sup>イ<sup>イ</sup>キイの要項 (Nikolai Bucharin, Das Programm d. r. Bolschewiki) 中に掲げられてゐる所の語であるが、此文章に於いて勞働者とか、不勞働者とかいつてゐるのは、すべて筋肉勞働者を意味してゐることは、その記述の上に明かである。

勞働てふ語を斯な風に局限して、單に筋肉勞働の意味とすれば、彼等の思想は全然謬つた思想であると斷せざるを得ない。何となれば勞働てふ概念は必ずしもさうした狹義にのみ限らるべきものでなくして、精神勞働即ち所謂頭腦勞働をも含む所の廣義にも用いられ得る概念である。猶其上に前節に於いて論じた通り、所謂社會文化なるものは、種々な頭腦勞働種々な筋肉勞働から産り出され者を織り成して出來てゐるものであるから、勞働を筋肉勞働に限るといふことになる。其社會文化をして甚しく貧弱ならしめることになる。而かも頭腦勞働の産り出す所の者は、之を筋肉勞働が生み出す者に較べれば個人的にも、社會的にもより多く重要な價値を具へてゐる者であることは、是も前に論じた通りであるから、勞働を筋肉勞働に局限してしまうことは、やがて社會文化の最も重要な部分を削り取てしまふことである。謂はゞ社會文化をして破産せしめることになる。是れ勞働を單に筋肉勞働に局限したボルシェヰキの思想の謬てゐるといふ所以である。

そこで次に勞働てふ語を精神勞働も、筋肉勞働もすべて之を含む所の廣義に解したなら、本節の冒頭に掲げた命題の眞偽は如何うなるだらうかといへば、是も實際問題としては種々面倒なことも起きて來るが、併大體の見地からいへば、正當な命題で

あるといふべきである。何となれば眞に人格者としての人間の生活を生活しやうとならば、前節に論じたやうに、必ず或る職業を執るべきであつて、無職業であるて、それで宜いといふことはないからである。

## 七

狭義の勞働の倫理に就いて、是非考察しなければならぬ問題は、前の第二第三第四の三節に互つて述べた處の職業の倫理が、狭義の勞働、即ち筋肉勞働の倫理として行はれてゐるか、どうかといふ問題である。現代に於ける勞働倫理の問題は、實は此問題を中心としてゐるのである。

如上の命題の形で表はされた問題は、之を幾つかにい分けして考察することが出来るが、其中第一に考察すべきは、勞働商品問題である。

倫理問題としての勞働商品問題とは如何なる問題かといへば、倫理上勞働を一個の商品と見做して可いか、不可かといふ問題である。

此問題は多くの人も之を説き、ヴェルサイユの平和條約にも之を明記して、平和條約 Pt. XIII, Sec. II, Art. 427, 1, 其不可なるを提唱してゐるから、一面から觀れば此問題

は既に解決されてゐる問題で、今更それを問題とするに及ばぬやうに観える。併他面から觀れば種猶々考察すべき點も残つてゐるので、矢張問題としなければならぬやうでもある。

此問題に對して不可と答へる點に於いては、私の見解も從來の人々のと異ならぬ。何故不可かといへば、勞働を商品とするといふことは、それを單に外物價値的の者とすることであり、而してその外物價値は、絶対に交換價値を有つことの出来ない人格價値とは異つて、交換價値を有ち、而して絶対に道德價値となり得ない者なるが故である。

更に他の方面から説明すれば、勞働は他のあらゆる人間の動作と同じく、外物價値的のものにもなり、又人格價値的のものにもなる。即ち非道德的のものにもなり、道德的のものにもなるのである。然らば其別れは如何うして生じて來るかといへば、それは自己の動機の如何によるのである。勞働を或る他の目的、例へばその場合には多く生活を支持していく目的を達成する方便と考へてやる時には、勞働を外物價値のものとなし、之に反して勞働をそれ自身の目的として、換言すれば前に述べたやうに自己の生活目標として或は生活内容を充實せしめんが爲めに、更に換言すれ

ばカーライルの言つたやうに『勞働は人生ぢや、勞働者の核心の情こころから、彼の神から貰つた力が生起する。全能の神から吹込まれた神聖な生の精が起き出すものである』といふ動機で勞働すれば、其勞働は人格價値的のものとなり、従て道德的のものとなるのである。此の如く勞働は動機の如何によつて道德的のものともなり、非道德的のものともなる者であるから、金即ち賃銀でそれを買はうといふのも可くないが、併罪はその方にもみあるのでなく、それを賣らうといふ方にも、道德的弱點はあるのである。さういふと『沽之哉。沽之哉。我待賈也』といつて、孔子でさへ自分の學徳を賣らうとしたではないか。賣るのが悪いなら、孔子も道德上間違つた思想を有てゐたといはねばならないではないか。かやうに逆襲するものもあるかも知らぬ。併孔子の此言は、自分の學徳を賣物にして、貴い價を得て、それで現世の歡樂を欲しいまゝにしやうなどいふ意味ではなくして、若し心を虚にし、禮を盡くして道を我に求める者があるならば、即ち興へて敢て吝まないといふので、決して普通の商品扱ひに自分の學徳を賣らうなどいふ趣意では毫もない。何しろ勞働を生活の方便と考へるといふが如きは、前きに述べた職業の三つのどれをも無にしてしまふものであり、更に他の方面からいへば、勞働を買つた處の人は、その賣手を自分の利欲を満足

せしめる方便に使ふことになつて従てその賣手の人格者としての尊嚴を冒瀆することになり、道徳上決して恕すべからざることになるのである。かうした譯で勞働を商品と見做すことは倫理上到底認容することが出來ないのである。

私は上述の理由からして勞働商品論に對して倫理上否定の解決を與へるのであるが、此不可といふことは前きに述べたやうに、目下の世界の定説であるので、結論だけならば、言ふにも及ばぬことであるが、併私は此に之に聯關して是非考へて見なければ問題があることを注意したのである。謂ふ所の問題とは如何なることかなれば、勞働は商品として之を買ふのも悪いが、又賣るのも善くないといつたが、買手も賣手も何故平氣でその悪い事をやるだらうかといふ問題である。私はマルクスの買手も賣手も皆其當時の經濟事情に制約されて、買はざるを得ずして買ひ、賣らざるを得ずして賣る必然なもので、ブルードンなどのいつてゐるやうに、自由な買手、自由な賣手などといふものはあるものでない (Marx, *Elend der Philosophie*, s. 14) といふ意見に必ずしも賛成する者ではないか、勞働を商品扱ひにするやうになつたのは、必ずしも買手賣手の罪ばかりでなく、今日の經濟上の組織にも幾分の缺點があるからであると思ふのである。今日の經濟組織の中に置かれてゐる富者と貧乏人とは、大抵多

くの弱點を有つてゐない人としては甚だ稀な程に、自然に其境遇に誘惑されて、富者は勞働の買方に廻り、貧者はその賣方に立つやうになるのである。是は寔に已むを得ない人間の疾患である。今日の經濟組織の中には、富者も貧者も其の勞働を樂しみ、その勞働の出來榮えに對して感興を起すといふことが困難である事情が伏在してゐる。それは今日富者が資本を卸して活動するとすれば、活動其者生産物其者が其目的でない、それは單に利益である。單に利益であるから粗製もすれば、濫造もし磨造もすれば變造もする。又それが爲めには、マルクスのいつたやうに、他の一切の商品とはちがつて、勘定よりも餘計な子を生むことの出來るやうな、一種特別の商品たる勞働を買込むことになり、而かも可成踏み付けることの出來るだけ踏付けた安價で之を買はうとする。貧者の方はどうかといへば、彼等は生活の資糧を有たない人間であるから、何とかしてそれを得なければならぬ。そこで彼等の所有してゐるあらゆるものを、或は賣り、或は質にする。而してあらゆる賣草質草をもすべて盡くしてしまつたごゝのつまりは、彼等の最後の所有物たる勞働を賣るといふことになる。(眞に商品として扱はれるものは勞働であるか、是はエンゲルス以來議論のある處である。之について私は商品は矢張勞働であると考へてゐる。併此

論述は本稿の目的外のこと故省いておく。只念の爲に一言此に斷つておくまである。かやうに買手も賣手も共に現代の經濟組織に餘儀されて勞働を商品扱にするやうになることが多い。そこで此倫理上の缺陷を直していく爲には、此現代の經濟組織といふ者を、幾分修正していくことが必要になつて來る。然らば其修正補訂の目安になる者は何かといへば、それは前述の職業の三目的であらねばならぬことはいふまでもないが、猶具體的にいへば今日では勞働者は資本家の爲に、資本家は利益の爲に働いてゐるので、即ち何時でも外物の爲めに働いてゐるのであるが、さういふ働方をやめて、勞働その者の爲に勞働をするといふ風になるやうにすること、**第二**には今日では資本家でも、勞働者でも、何時でも自分の體に飽をかゝつけ勞働してゐるのであるが、換言すれば勞働を減耗衰弱せしめんが爲めに勞働してゐるのであるが、そんな働方をやめて、勞働を益強く益盛にするやうにすること、**第三**には今日では資本家も勞働者も、勞働をすればする程、兩者のディスコーダンスが激しくなるやうになつてゐるが、それは飛んでもないことで、兩者勞働することによつて、益一致合體することが出来るやうにすること。斯んな事柄を目安として考へねばならぬ。賃銀のことも、勞働時間の事も、婦人及少年勞働者の事も、勞働組合の事も、工場委員制度のこ

とも、すべて單に之を經濟問題として扱はうとすることなどは飛でもない勘違ひの考で、そんな考方でとても解決のつくものでない。以上に述べたやうな意味に於いて之を社會文化的、社會倫理的に取扱つて、始めて満足な解決を得ることが出来るものである。

(大正二〇、九、二三稿了)